

ジョージ・エリオット論（二）

—『偉大なる伝統』より—

F. R. リーヴィス 著

藤井元子 訳

第二章 『ロモラ』より『ミドルマーチ』へ

われわれがもし『ロモラ』においてジョージ・エリオットは「抽象的なものから具体的なものへと進んで（‘proceed’ して）いる」と判定することをたじろぐとすれば、それは、「進む」‘proceed’ という言葉が「達成する」‘attain’ という意味を含んでいるように思われるからであろう。この創意と史実の再構成からなる不朽の偉業^①についてヘンリー・シェイズは次のように述べている。「『ロモラ』はジョージ・エリオットの他のどの作品よりも作者の道德意識から展開された作品である。しかもこの場合、道德意識を取り巻いているものは、文学作品の創作にあたり作者によってなされた実に多量の調査研究である。」^②と。実際「〔作者がここに描き出している〕人物や場面」は「深く瞑想され、実質的素材をもって支えられ」、しかも、これらの人物や場面を通して作者はその独特な〔道德的〕先入観を表現しようとする。しかしながら、それらの人物や場面は一般化された興味の状態から出ていない。つまりそれらは、磨ぎすまされた刃のように鋭く^{リアライズ}実現されるにはいたっていないのである。たとえば、積極的利他主義がやや欠けている状態から発して遂には致命的ともいうべき完全なる邪悪へと展開してゆくティト・メレマ^③は、ジョージ・エリオットお得意の道德的ないし心理的テーマを例証している。しかしティトは似然として一つの例証としてとどまっている。しかもそれは、作者によって思いつかれ、それについて深く瞑想され、非常な苦心を払って明示された一つの例証にすぎない。彼はテーマを示し、かつそれを、‘life’ として表わすところのより熾烈なりアリティともいうべき存在になっていないのである。これと類似した、いや、それより更にできればのよくないサヴォナローラ^④に関する失敗は、レズリー・スティーヴンが次のような短評を混えながら引用しているあの分析的でかなりごつごつした散文^⑤によって十分に示されているであろう。（レズリー・スティーヴン著『ジョージ・エリオット論』134頁）

このほとんどドイツ語的ともいうべき従文のつらなりは、かくも明白なる事実を無感動に伝えているのみならず、かえってサヴォナローラ自身を読者から遠ざけてしまっている。たとえばわれわれは、ハムレットのごとき人物の語る言葉にではなくして、かかる人物が「あるべきかあらざるべきか」^⑥の独白を語るにいた

る心境を分析する思慮深い批評家の言葉に耳を傾けているのである。

——すなわち、サヴォナローラを描写するに際し、作者の分析的態度は充分生かされているけれども、サヴォナローラなる人物そのものは何等〔リアルな〕存在性をもたない。ロモラ自身に関していえば、レズリー・スティーヴンはこれをサヴォナローラより好意的に——事実非常に好意的に——批評している。実際ロモラは、真しな分析へとたち向かった強力な精神が創作の分野へと入り込もうとしておかした失敗とはいいいきれないなにかを表わしている。彼女はあきらかに情緒的所産である。事実彼女は、マギー・タリヴァーと共に理想化された今一人のジョージ・エリオットの分身であり、マギーよりは真実性が稀薄で、しかも、マギー以上に理想化された存在である。彼女は、貴族的で威厳のある美しさを湛えている一方、作者ジョージ・エリオット自身のものである知的能力、社会的因襲からの解脱、もぢまへの信心深さ、精神的高揚への渴望が混然と一体をなしている女性である。

ロモラが今、是非とも実行に移さねばならないと思っている火急の問題は、……悲しみに満たされた人生を、積極的愛に満たされた人生に変えてゆくように、没我的感情の炎を絶やすことなく、これを常に燃やし続けてゆくことであった。^⑥

——これは「マギー」が「ロモラ」に替わったのみで、あきらかに、『フロス河の水車場』からその自叙伝的要素を含んだ一節として引用されたでもあろうような部分である。さらにまた憧憬に満ち満ちたシュトラウスの翻訳者の姿がわれわれの眼前に浮かび上ってくるのは、次に引用されている一節にみられるようなシチュエーションにおいてである。^⑦

ロモラは祭壇の踏^{きざはし}段にぬかづきながら、熱誠——それは、そのためにこそ彼女が生き甲斐をみいだし得る唯一の力でもあるのだが——が、目を閉じたまま見えるものも見ようとしないう片意地な態度とひとりよがりな空想で、そのはげ口をどうしようもなくふさがれてしまうあの耐え難い苦悶の時を過していた。^⑧

そしてさらに、われわれが、「最も身近かなものに対するやさしいおもいやりにも、やはりそれなりに一つの危険性が含まれていて、かかる感情は、より広大な目標——それなしには人間の生が宗教的境地にまで高まることはないのであるが——に対して懐疑的になり、引込み思案になりがちなものである。」^⑨という一節を読んでゆくとき、われわれは、みずからが、ミル^⑩やマッシュウ・アーノルドやコント^⑪などジョージ・エリオットと同時代の十九世紀知識人の「火急の問題」に直面していることをさとられる。それゆえ、さらに、

このように、自分がいままで深く敬愛していたひとに対する信頼をすっかり失くしてしまったひとはだれでも、「自分は、かかる打撃を受けながらも、これによって目に見えぬ善なる神への信仰が揺らぐことはな

い。」と、軽々しく述べることはできないであろう。人間が他者への深い信頼を失なうと共に、生の尊厳もまた消失するものである。このような場合、われわれは、みずからの、より善なる面に対する信頼も失くしてしまう。というのは、かかる善なる面は、われわれの思考のなかで墮落に瀕するごくありふれた一般的性情の一部にすぎないからである。要するに、人間への信頼が消失した場合、精神のより高尚な衝動は鈍らされるものである。^⑩

の部分を読んでゆくと、われわれは、作者個人に関して詮索的ならざるを得ないような気持ちにさせられるのである。——つまり、「これは、「作者がかつて敬愛した」ジョン・チャップマンのことを暗に指しているのではなからうか^⑪」と、おもわず尋ねてしまう。しかし勿論、以上の問に対する答はここでは問題ではない。ただ強調すべき点は、女主人公と作者とのかかる密接な関係は、ジョージ・エリオットの他の作品におけると同様『ロモラ』においても何等作品の長所につながるものではない、ということである。なるほど、あのマギー・タリヴァーがわけもっていたリアリティはロモラには欠けている。しかし、『フロス河の水車場』においてわれわれを当惑せしめたところの欠点は、マギーを通してみられたのであるが、実はそれと同質の欠点が、この『ロモラ』においても、その女主人によってもたらされているのである。

さきに引用した箇所は、ロモラが小舟に身を横たえて、風の向くまま潮の流れのままに漂っているというエピソードの始まりの一節である。「ロモラはこの時」「すべての動機が打ち砕かれた今は、選択という心の重荷から自己を解放し、眠りに陥ったまま運命の力——それはこの場合、死かさもなれば彼女をして今ひとたび新たな生の意識にめざめさせてくれる必然性をもたらすものであるが——に自己をゆだねてしまいたい^⑫」〔と考えている。〕そこで彼女は、漂よう小舟に身をまかせながら次のように自問自答する。「少女時代のわたしが夢みていた理想を、はたしてわたしは自分の生活のなかにみいだし得たであろうか。いや、そのようなものは決してみいだし得なかった^⑬」と。しかし、今やロモラは、彼女が少女時代から心に抱きつづけてきた漠然とした理想——それは、客観的態度でこれを見るならば、全くひとを困惑させるものであるが——を現実生活のなかにみいだそうとしている。彼女は疫病の蔓延する村に漂着する。ここで、彼女は、病める村びとたちに救いの手を差しのべる聖母マリアの役割を果たすことになる。ところで、この「幾多の病める者たちを看とるその姿に後光のさす聖なる御母」としての彼女を村びとたちは一つの奇跡としてうけとめる。しかしそればかりではない。「聖なる御母」の役割はロモラ自身にも奇跡をもたらすことになる。というのは、かかる役割によって彼女は、天から与えられた「没我的感情の炎」でその心を燃えたたせ、かくして彼女のいわゆる「火急の問題」を解消することができるようになったからである。

ひとたび『ロモラ』を読んで、再びそれを読み返してみようと思うひとは殆どいないであろう。また、それを読み終ったものはだれしも、一種の重圧感からくる呻うめきごえ声を発せずにはいられないであろう。この作品は、非常に才能に恵まれてはいるけれども、その用い方を誤った精神

の所産である。しかもそれは、ジョージ・エリオットの死後、その名声が衰えていった一時期を通じて、世間に流布された彼女の作品に対する批判的評価と一致するただ一つの作品である。

それにもかかわらず『ロモラ』は常に廉価増刷版のカタログのなかに加えられている。したがって、おそらく『フィーリックス・ハウルト』を手にとってみたよりも余程数多くの読者が『ロモラ』と取っ組みあいをしたことになるであろう。『フィーリックス・ハウルト』——それは、読者を再びイギリスに連れもどしてくれるものであるが——の執筆にあたり、ジョージ・エリオットは1830年頃の『タイムズ紙』の調査を行った。しかし、ここでは、歴史的事実の再構成という、あの身も心もすり減ってしまうようなすさまじいまでの労苦は、もはや、払われなかった。もっとも、作者は、この小説のプロットを丹念に構成するために、その全く不得意とする面での努力を惜しむことはできなかったけれども。しかも、このような努力は、(今日のわれわれにはそう考えられるのだが)あのサヴォナローラ時代のフロレンスの生活を再現するために払われた作者の苦心と等しく——いや、それほどまでに作者の心を乾からびさせてしまうものではないにせよ——意固地なままでに向うべき方向を誤ったものである。この全くもってヴィクトリア朝的ともいえる複雑に入り組んだプロットは、これまた正確を期そうと非常な苦心を払うあまり、読者がこれを理解するには、矢張りそれなりの詳細な知識を必要とするあの難解至極な限嗣相続という法律問題にからませて組立てられている。(この問題に関する専門的助言は、作者と同じ実証主義者の仲間であるフレデリック・ハリスン^⑧が行っている。)それゆえ、もし『フィーリックス・ハウルト』の読者がジョージ・エリオットの崇拜者であるならば、彼は、気の進まぬながらも、この小説の複雑なプロットを追跡してゆくために、悪戦苦闘的努力を払わねばならないであろう。

「抽象性」から生じ、かつ、それが、人を信服させずにおかないところの知覚対象にまで具体化されていない「道徳意識」の「内省的」優勢が特に顕著なのは、『フィーリックス・ハウルト』という、この小説の表題によって示されているテーマを扱っている部分においてである。^⑨フィーリックス・ハウルトは一人の理想を夢見る労働者である。彼は学問を身につけているにもかかわらず、みずから所属する労働階級に対し、非常に忠実であり、(ただし、忠実とはいうものの、それは、彼の態度・風采が終始一貫して粗野であるという程度においてである)かつ、労働階級の生活改善に生涯をかけようとしている。しかしながら、政治的分野で積極的役割を果たそうとしながら、一方において彼は、組織化された政治的行動なる妥協策の是認を拒否している。彼は急進主義者がごく常套的手段として行なっている選挙区民との争いを公然と非難している。すなわち、彼によれば、是認してよいことは、合理主義的立場から純粋なる原則に訴えること、ただそれのみである。また、彼の意見に従えば、政党が首尾よく政権を獲得するために實際上必要なものとして、従来一般に擁護されてきている政党間の争いは、結局人民の主張の質を低下させ、かつ、その低俗さを暴露するものである。したがってひとは

それらの争い事に係わりあいをもってはならない。フィーリックスは、その理想におけると同様、その行為においても、気高くして勇敢なる存在である。このように彼は、その作者によって、全面的な信頼を受けるに足る人物として裏書きされている。そして、主人公におけるこれらの非実際的な性格を描写するために、ジョージ・エリオットは、政治・経済・社会の歴史に対する、と同時に、文明という人類全体の前進的動きに対する、強い関心を示し、かつまた、これらの諸事実を、鮮やかな手さばきで駆使しようとしている。しかしながら、作者のかかる態度は、ジョージ・エリオットにおける知識人と作家との両面の関係について、一般に抱かれている非難に満ちた見解の裏付けをなしているかのように思われる。急進主義者フィーリックス・ハウルトは、たとえば次のような調子で語りかけている。

「ああ、世のいわゆる指環をはめたり香い油をつけたりしているやから共ときたら。——僕はそのような連中の仲間入りだけはかんべん願いたい。しゅすの襟飾りで喉元を締めつけておけば、新しい欲望も目的も湧いてこようというものだ。首のつけねのあたりで形の変化がおこると、まず手始めに好みが変わり、次には考え方まで変わってくる。そのおっかけぎまは、まるで腹の減った犬の脚が鼻の向く方向についてまわるようなものだ。僕は、手を汚さないで暮しをたてているひとたちのそのお上品ぶった態度だけはごめんだ。もしそんな連中の仲間入りをすれば、しまいには、貧民のために役立つのだという口実にことよせて、その実、貧民から脂じみた小銭をふんだくって、それで自分に上等な上着をあてがひ、御馳走をたらふく食うようなことにならないとも限らぬ。もっとも、口先だけの煽動政治家になるぐらいなら、ペイリーに養われた太っちょの鳩[㊦]になる方がましだと僕は思うかねえ。」

ここでフィーリックスはやや声の調子を変えた。

「だがねえ、僕には、もしできれば、それとはおおよそ違ったタイプの煽動政治家になってみたい気持は充分あるかねえ。」

「それじゃ君は、近頃盛んな政治運動に大いに関心ありというんだねえ。」

ライアン氏は、それと分る程度に目を輝やかしながら云った。

「うん、僕はこれでも関心だけは大きいもっているつもりだ。僕は政治に全く関心のない、いや、あってもそれを他人に認識してもらおうとしない連中はみんな軽蔑にあたひすると思っている。」[㊧]

また、次の場面では、フィーリックスは初対面の若い婦人に向って話しかけている。

「ああ、世のいわゆるお上品ぶったかたがたときたら。そのひとたちがどんなものか僕には分かっていますよ。」

フィーリックスは例のごとく声の調子を張り上げながら云った。

「そういうかたがたは、皆さんお上品ぶりを発揮するために例のこじつけということをなさる。たとえばここで『腐る』ということを使い表わそうとする。ところが、この言葉は、いやなことを連想するので、皆さん、これをお使いにならない。かわりに『シュガー・プラム』といたり、ひどく廻り道をしたほかの云い方をなさる。そのために相手に本当のことが伝わらなくなつたって仕様がないうことになる。いわゆる

ぶったひとたちのお使いになる遠まわしの美辞麗句は、そんなものなのです。これでは、いかさま師を飾りたてて正直者に仕立てたり、鉄砲玉の代りにゆであずきをぶっぱなすようなことは朝めし前ってことになり
ますよ。僕はそういう連中のまわりくどい口のきき方が大嫌いなんです。」^{(一)⑧}

これらの、未経験と結びついた一般的意図からくる数多の結果は、悲しいかな、明らかである。アダム・ビードを、『ミドルマーチ』のケイレブ・ガースと比較した場合、前者に顕著にみられる理想化の傾向は、実は、『アダム・ビード』という作品の長所にはなっていない。しかし、ジョージ・エリオットは、田園地方の大工アダム・ビードを、その身近かな体験から親しく知っていた。ところが一方、町に住む理想主義的手工業労働者フィーリックス・ハウルトに対しては、作者は、彼を通して、「労働の神聖」を具現せしめるために、何等直接的体験より得た知識によって限定されていないところのみずからの「道徳意識」に縋ろうとしているのである。

これに対し、理想主義とはきわめてほど遠い存在である、フィーリックス・ハウルトの母親はどうであろうか。彼女はフィーリックスと等しく不運なできばえではないにしても、彼以上にわれわれには納得できない人物である。（もっとも、彼女は単なる脇役にすぎないけれども。）要するにフィーリックスの母親は、現実生活の場から、というよりはむしろ、ディケンズの小説のなかから飛び出してきたような人物である。組合教会派の牧師ルーファス・ライアン師にしても、彼は清教主義の英雄時代を思わせる、思い切り風変りな人物であり、しかもその描写にはスコット^⑨の作品からの影響がみられる。しかし彼は、われわれ読者をうんざりさせとともに、われわれにはどうにも納得し難い人物である。——かく述べてしまえば、それはかなり厳しい批判になるかもしれない。なぜならば、彼の語る言葉はこの小説のかなり多くの部分を占めているからである。ライアン師の娘として登場してくる若い優雅な女性エステルは、ジョージ・エリオットの創作になる他の女性についての作者の描き方、および、女性の魅力に関する作者の処理の仕方と関連させて眺めてのみ興味深い人物である。

しかしながら、従来だれも考察したことのない今ひとつの要素がこの作品のなかに存在している。それは、次に掲げる叙述に示されている要素である。すなわち、ここにおいて交わされている対話は、フィーリックス・ハウルトが加わっている場面でのそれとは、質において著しく異なり、かつ、その分析的叙述は、『ロモラ』におけるあの顕著な特質とも大いに趣を異にしたものである。（しかもこの部分は、散文の文体において、『ロモラ』のそれとは格段の相違がみられる。）

「ハロルドは頭が切れて利口ものだから」トランサム夫人が一向口をきこうとしないので、ジャーミンは云った。

「議会に出れば彼は頭角をあらわすこと疑いなしでしょうな。そのうえに彼はあらゆる仕事に対してすばしこい目をもっている。」

「そのことがわたしにはかえって心配のたねなのです。」と、トランサム夫人は云った。ジャーミンと一緒にいると、いつものばねばならぬあの苦々しい悔恨の情が、今日の彼女には一層激しく感じられた。彼女が常に心のうちを感じている「誤ちを犯した」という意識が、自分の言葉や行為の端に、いや、自分のでなくとも、相手の言葉や顔付に現れることに我慢がならなかったからである。長年の間、トランサム夫人とジャーミンの間には、過去について一切口にしないという暗黙の契約がかわされている。その理由は、彼女のほうでは、あの事が忘れられないからであり、彼のほうでは、それがますます記憶から薄れているからである。

「いずれにせよ、ハロルドが、君に対し不親切だと僕は思わない。物事に対する彼の考え方が君を苦しめているだけのことだ。それを別とすれば、ハロルドは思いやりのある息子に生まれついていると僕は思う。」

「ええ、たしかにそうなのでしょうね。でも、思いやりがあるといっても、それは、男性がたが、一応うわべだけは女性につくす程度のものなんです。クッションだの車だの差し出し、もっと楽しんだらよいと云っておきながら、その実、心の底では、軽んじられ、ないがしろにされても女はだまっているといわんばかりのそういう男性方の思いやりと同じたぐいのものなんです。わたしには、あの子をどうする力もないのです。本当に、全然ないのです。」

ジャーミンはむきなおってトランサム夫人の顔を見た。彼女のまるで自制力を失っているような物の云い方に接するのは久しぶりのことだったからである。

「ハロルドが今までの君のやり方を快よく思っていないとでもいうのか。」

「わたしのやり方ですって、！」

トランサム夫人はひどく腹立たしげにジャーミンに激しいまなざしを投げかけながら云った。彼女ははっとした。自分は今、たいまつに点火して、みずから招いた愚劣でみじめな過去を照らし出すようなことをしているのだ、と気付いたからである。わたしはこのひとと云い争いなどすまい。このひとのことをどう思っているかということなども口に出して云うまい。それは、なかば習慣と化した決意だった。女としての誇りや感受性を傷つけないで、そのままそっとしておきたかったのだ。それは、彼女の心の中に、手に接吻され男性の騎士的行為の対象にされたいという、女らしい願望がひそんでいたからである。そこで彼女は、身をふるわせながら再び押し黙ってしまった。

ジャーミンは、あきらかに、当惑を感じていた。しかし、ただそれだけで、彼の思いのなかには、トランサム夫人の心の内で今や錯綜している、あの傷つきやすい感受性に相当するものは、なにもなかった。なるほど、ジャーミンの頭脳は鈍いところではない。しかし彼は、自分は他人に対して細かな思いやりを示したい、寛大でありたい、と思うときはいつも、ついなんとなくどぎまぎしてしまう癖があった。つまりそうした場合、彼は弁解めいた言葉を口にすることによって相手の機嫌をとろうとしたのである。道義上の俗悪さは親ゆずりの体臭のようにその心や体にしみついていたので。今や彼は例のどぎまぎした態度を示していた。

「トランサムの奥さん。」

ジャーミンはいかにも親切そうな口調で云った。

「君は動揺している。どうも僕に腹を立てているらしい。だが、よく考えてごらん。そうすれば、僕のほ

うに、君が不平を云うような落度はなにもないということが分かってもらえるだろう。もっとも、男の生きる道にはどうしても避けて通れぬことがあって、それをも君がとやかく云うのなら話は別だがねえ。僕は君の生活が順調にいつていたときも、そうでなかったときも、いつでも君の期待どおりに尽くしてきたつもりだ。これからだって、できればそうしたいと思っている。」

彼の語るひとことひとことが、夫人の耳に快よく響いた。それはあたかも、露出した彼女の腕に、それらの言葉がくい込んでくるような感覚であった。女性の側にあつて、異性から親切にされたり、求愛の言葉を語りかけられたりすると、時と場合によっては、他の男性から愚弄されるよりも、かえって、もっと腹立たしく、より一層大きな屈辱を受けたように感ずることがある。ところで、自分よりはるかに感受性の鈍い相手に、かつてひそかに身を任せてしまったこの憐れな婦人は、事態の悪化をおそれて、かかる屈辱をもあえて堪え忍ばねばならなかった。少なくとも、今の彼女にとって、きめの粗い親切は、野卑な怒りよりましであった。しかも、おおよそ内輪同志のもめごとでは、すべて、感受性の鈍いほうが、その鈍さゆえに、優位を占めるものである。今までのいきがかり上、ジャーミンの実務面での行為に関して、彼女は絶対に口外するようなことはしなかった。おかげでジャーミンは、彼女との間でどんな放縦な取引きを行なつても、罰せられなくてすむと考へている。トランサム夫人には、このようなジャーミンの手の内がよくわかつていた。いままで、彼女は、ジャーミンの不誠実な身勝手さからくるあらゆる困難に、じつと耐えてきたのだ。ところが今や、以前から懸案中のハロルドの財産相続問題がようやく実現の運びとなり、ハロルドは帰国した。彼の帰国は、それがトランサム夫人とジャーミンの二人に意外にも強力な透徹力と能動性と支配力をもつてのぞむという結果をもたらした。このため、彼等は現実の困難さにまともにぶつかつてゆかなければならなくなった。こうした事態は、結果が不確かなものならば、そのまま不確かなものにしておこうという、長年続いた二人の曖昧な関係が招いた当然の成り行きであった。^⑤

以上の引用文にみられる特質からみてあきらかなことは、そこで扱われている主題が、作者によって、心底より深く感じとられ、鋭く実感されている、ということである。これは、トランサム夫人、息子のハロルド、トランサム家の顧問弁護士マシュー・ジャーミンに係わる主題である。またそれは、『フィーリックス・ハウルト』における他の主題およびジョージ・エリオットの初期の作品にみられた諸主題とも全く質を異にしたものである。そして、かかる主題に直面した場合、われわれは、ヘンリー・ジェムズのいわゆる「直覚的」‘perceptive’ と「内省的」‘reflective’ との対照概念が、ここではもはや適用し得ないことを悟らされる。すなわち、以上述べたことは、次のような問を發してみることによって説明できるかもしれない。「それでは、一体「『フィーリックス・ハウルト』の一面にみいだされる技法が、ジョージ・エリオット従来の作品にみられるそれに比し、はるかに優れたものであり、かつ、円熟性が増し加わつたものである、ということは、一体いかなる意味においてであろうか」と。もしわれわれが以上のような問をみずから投げかけてみるならば、われわれは、これに対し、次のように答へることができる。すなわち、「『フィーリックス・ハウルト』の一面における技法がより優れているのは、そこに、〔作者の側において〕対象を直覚的に把握する力 ‘perception’ が働

いているからである」と。そして、この‘perception’とは、かかる perceiving の行為が、多年にわたって積み重ねられた深い体験——ただし、この場合、それは、作者の内省的思考によって十分に考えめぐらされ、一つの中心に集約され得るような体験であるが——を一つの焦点にしぼるものであるがゆえに、より一層鮮明に、かつまた、より一層深く対象を直覚するという行為となるのである。またこの際、‘perceive’される対象は‘perceiving’の行為に加えるところのものいかんによって定められる。ジョージ・エリオットがかかる行為に加えたものは、この『フィーリックス・ハウルト』の一面においては、円熟した悟性としての機能を果たしている非常に優れた知性であった。彼女における知性は、必ずしも常に、情緒的要求によってその価値を低められたわけではなかった。またジョージ・エリオットの芸術家的側面と知識人的側面との関係についても問題は必ずしも知識人としての彼女の知性が、芸術家としての彼女の未熟な面に加担したわけではない、ということである。（もっとも、彼女の知識人的側面には「^⑧ 大脳皮質部のち緩に見舞われることがない」というあの驚嘆すべき特質がそなわっていたのであるが〔それはここでは問題外である。〕）

この芸術家的側面と知識人的側面との間の至福に満ちた関係は、トランサム夫人をめぐる主題にあらわされたあの新しい「個の超越」‘impersonality’^⑨のなかにみいだされるであろう。たしかにこの主題は、ジョージ・エリオット文学におけるもっとも熾烈な自叙伝的箇所にも劣らない程、集中的に表現されている。しかしながら、もっとも妥当な姿として描き出されているマギー・タリヴァーの強烈な諸特質のなかにさえ、われわれが感じとるところの、あの直接的に個人的な心の振動——それは、作者みずからが個人的に女主人公の役割のなかに加わっていることを表わしているのであるが——は、この『フィーリックス・ハウルト』には表わされていない。このことは、まさに、「芸術家が完成の域に近づけば近づくほどますます、彼自身において、苦悩するところの人間と創造するところの精神は相互に独立した個々の存在となる」ことを物語るものである。ジョージ・エリオットが一人の偉大な創造的芸術家としての面目を新たにしているのは、『フィーリックス・ハウルト』のトランサム夫人を扱った部分においてである。だれしも認めるように、この主題のなかでは、作者は、女主人公を自己と同一視する誘惑に陥りやすい存在^⑩は描いていない。トランサム夫人は、地方の素封家の出身である。彼女がその作者といかに似ても似つかない存在であるかは、以下に掲げる彼女についての叙述のなかに充分表現されているであろう。

彼女には、高貴な生まれからくる傲慢な態度があった。こうした態度は、いざ革命ということになると、彼女を暴徒達の憎悪と罵詈雑言の対象にするようなものであった。また、その容姿は、社会的地位の高さを物語るかのようで、そのために、誰も彼女を無関心のまま見過してしまうことはなかった。彼女の姿は、妃としてでなく、生得の権利で君臨する女帝、いふなれば、内紛にもめげず、国を統治し、国家間の協定にあてて違反し、相手方の報復的侵略をおそれ、つぎつぎに他国の領土をわがものにし、絶望的事態に瀕しても

なおかつ、反抗的であり、永久に満たされることのない女性としての心の渇きを感じなければならない女帝にふさわしいものであった。……若かりし頃の彼女は、聡明で教養ある女性として通っていた。そして、自分でもむしろ知的な面で秀でた存在になりたいと思っていた。それゆえ、彼女はフランスのいわゆる危険な作家たちの著したもののなかで、比較的肩のこらない小説をひとりひそかに拾い読みし、人前では、パーク^⑩氏の文体がどうの、シャトープリアン^⑪が雄弁だのと語り、『抒情歌謡集^⑫』をけなし、サウジー氏の『サラバ』を熱愛していた。彼女の考えでは、フランスのいわゆる危険な作家たちの小説は、常に邪悪なものであり、それらを読むことは罪悪であった。しかしながら、罪深い事柄は、えてしてひとに快感を与えるものであったし、また、本当に善いこととして確信できる事柄は、実に退屈で無意味なことが多かった。彼女は聖書に出てくる人物を揶揄することが得意であったし、邪な恋の情熱を描いた物語には興味があった。しかしそれにもかかわらず、彼女の確信するところによれば、安全で実直な生活は、祈禱会や説教に列席し、ピューリタンやカトリック教ではない正真正銘のイギリス国教会の立派な教義を信じ、またその典礼にあずかることにあった。事実、イギリス社会の既存の制度を保存し、下層階級の出すぎた行動や貧民の不平を押さえる、そういう生き方、もしくは人生観のなかに、実直で安全な生活があると、彼女は信じて疑わなかったのである。^⑬

以上の叙述が示しているように、トランサム夫人を扱う作者の扱い方は決してアイロニカルなものではない。しかし、徹底した客観性をもって描き出されているトランサム夫人のシチュエーションには、悲劇的アイロニーともいうべき一種のアイロニーが含まれていることはあきらかである。そして、かかるシチュエーションは、作者によって客観的に描写されてはいるけれども、同時にそれは、読者の心に強く訴えるような共感をもって描き出されている。ただし「共感をもって」といっても、それは、トランサム夫人の味わう苦悶や悲嘆が、そのまま作者自身のものであるとはいえないであろう。いずれにせよ、トランサム夫人のシチュエーションが、作者によって、共感をもって描き出されていることは事実である。しかし、この共感のなかには、自己憐憫や自己放縦の痕跡はなにひとつ含まれていない。トランサム夫人は、不義を犯した者が、応報の女神ネメシスに罰せられてゆく姿をとらえたものである。彼女のかかる姿は真に道徳的な想像力によって着想されているけれども、その表現は、作者の側における心理観察にもとづいて行なわれている。しかも、この心理観察は、そこに含まれているところの意義が、徹底した説得力をもっているものであるがゆえに、教訓的作家は、トランサム夫人がその犯した罪を償うために払わねばならぬ必然的代償を、何等強調する必要がない。事実、ここでは、強調は何等なされていない。この点で、われわれが、ジョージ・エリオットは教訓的作家である、ときめてかかるならば、それは、強調すべき問題点を見誤っていることになると思われる。ここでは、ジョージ・エリオットは、一人の偉大な芸術家である。さらに云い換えるならば、彼女は、大作家のものである鋭い心理的洞察力、および、人間的評価をなすにあたってのきめ細かな知性を具えた一人の偉大な作家なのだ。次の一節には、トランサム夫人の直面する悲劇の一面が表現されている。

母性愛とは、最初は没我的歓喜であり、そのゆえにこそ、ほかのすべての感情はにぶらされてしまうものである。それはまさに動物的存在の拡大であり、その自我の領域を想像の上で拡げはする。しかしながら、長年経つうちに、母性愛は、他の永続的愛情と同じ条件によって培われない限り、すなわち、自己を抑え、他人の経験に生きるという共感の力によって培われない限り、もはや喜びであり得なくなる。トランサム夫人は、あのとり返しのつかない事実を、漠然と重苦しいものを感じていた。いまの彼女を支えているものは息子を独占することこそ、みずから生きてゆく最上の目的なのだという確信であった。そうとでも信じない限り、過去の思い出が、身の毛のよだつ程いやな相手となって彼女を苦しめるのだった。^⑤

勿論、トランサム夫人は、みずから「漠然と重苦しいものを感じている」ところの「あのとり返しのつかない事実」を、あるがままに認識することはできない。彼女には、自己改革は望めず、また、彼女にとって、人生における真の生き甲斐は、他を抑え、他に自己の意志を行使することにあるのだ。以上の事柄は、何等非難がましい気分に入れわれを駆りたてるようではなく、むしろ、避け難い結果にみまわれるトランサム夫人に対して、読者に痛ましさを感じさせるように表現されている。彼女は、その頭の愚鈍な夫に対して、軽蔑以外のなにものも感じていない。この夫に似て、できのよくない長男の早逝は、彼女にとって、むしろ喜ぶべきことである。なぜならば、長男の死によって、トランサム家の財産は、次男ハロルドが継ぐことになるからである。ハロルドは、シリア地方から帰国後は、かの地でひと財産築いた彼のことうえ、きっと、抵当に入ったこの家屋敷を立派に建て直してくれるであろう。そうすれば、自分は、おくれればせながらでも、トランサム・コート的女主人として、ほしいままに采配をふるい、社交会において正当な立場をわがものにすることもできよう。これらの夢は、渴望に満たされた長年の間、彼女が心に抱いていた唯一の生き甲斐であった。しかし、その夢も、母子が対面するや、はかなく消え去ってしまう。息子のハロルドはまた、彼は彼で、他を支配し、他に自分の意志を行使することを生き甲斐としている男である。この事実を悟ったとき、トランサム夫人が味わうあの絶望的痛恨の情は、文学の分野において実に比類のない、一種の収斂作用しゅうれんを読者の心に惹き起すような迫力をもって描写されている。（それは、とりわけ、女中デナーとやりとりされる彼女の話し言葉のなかにあきらかである。）

この苦渋に満ちた挫折感と絶望感とに、やがて恐怖の感情が加わることになる。ハロルドは誰にも親切を施す男であるが、母親に対しては、彼女の意中を汲みとってやるということをしてない。この彼が、「自分は急進主義者である」と宣言する。そしてかかる宣言を行なうことによって、彼は、母親の社会的野心を打ち砕き、家庭における母親の権威——それを保ちつづけることは、彼女自身の「生き甲斐」でもあるのだが——を踏みにじってしまう。しかし、問題はそれだけではない。ハロルドは、トランサム家の財産管理人マシュー・ジャーミンの職務上の行動に疑惑を抱き、この件について内密に調査を進めてゆくことを提案する。このような提案を行なうことによって、ハロルドは、母親をおびやかすことになったのである。まさにこれ

は、ひとたび地雷が爆発すれば、彼等三人諸共、こっ葉みじんに吹き飛ばされてしまいそうな気配である。というのは、ハロルドは実はジャーミンの隠し子でもあるからなのだ。

ここで注目しなければならないことは、トランサム夫人の若かりし頃犯した過失を叙述する際の作者の態度には、ヴィクトリア朝教訓作家のそれが何等含まれていない、ということである。この事は、同時に、円熟したジョージ・エリオットの技法の特質を示しているともいえる。かかる円熟した技法の領域にあつては、「このことだけはタブーである」という態度はみじんも感じられない。つまり、そこには、興奮したまま押し黙ってしまう態度、怪しげなことは素知らぬ振りをしてわざとこれを避けて通ろうとする態度、非難がましさが思わず身内に湧き起ってくるような態度——そして、これらはいずれも、ヴィクトリア朝小説において、不義密通という題材が扱われる場合に典型的な、さまざまな形であらわされた情緒性でもあるのだが——は、いささかもみられない。そこにあるものは、事柄を、もっぱら事実^に則して、叙述してゆこうとする、作者の側における、率直な態度である。換言すれば、それは、「人間性とはかくの如きものである」とか、「これが真実なのだ」とか、あるいは、「これらのことはいかんともし難い自然の成り行きなのだ」とか、などといったような態度である。トランサム夫人の味わった恐怖の感情はさておき、彼女が直面しなければならないところの過去へのもっとも激しい悔恨の一面は、つぎに引用される箇所^に叙述されている。(これは最初に掲げられた『フィーリックス・ハウルト』からの長い引用文の後に続くものである。)

激しい恐怖が彼女の胸におおいかぶさってくるような状況に立たされたとき、——そのことをジャーミンはすっかり心得ていて、その原因は自分にあると考えていたに違いないのだが——トランサム夫人は、思わず憤りの感情を爆発させ、その悪辣な行為を呼ぶにふさわしい言葉で、彼を罵倒してやりたいとおもった。ジャーミンが、彼女の心の中のすべてを無視して、いんぎん無礼な態度で語りかけるとき、夫人はますますその怒りを彼におちまけてやりたいと思った。しかし、「こうなったのもみんなあなたのせいですよ。」という言葉が喉元まで出かかるとすぐに、「いや、それは君が招いたことじゃないか。」という返事が、彼女の心の中でささやかれる。その上、そうした言葉が彼自身の口から言い出されることは、彼女には耐えられなかった。それではどうすればよいのか。このように激しい心の動揺の後、彼女は、しばらく口を閉ざしたまま黙っていたが、やがて、もの静かなふるえをおびた声で言った。——

「どうかわたしにあなたの腕をかしてください。」……

彼女がその手を離すと、ジャーミンは自分の腕をだらりと下げ、両手を上衣のポケットにつっこんだ。彼は肩をすくめながら言った。

「なあに、^{やつこ}奴さんがこのわしを利用する気であるなら、逆にわしの方が利用してやるまでさ。」

ジャーミンの態度が、今までとはがらりと変って、^{どうもろ}獐^ら猛な面がむき出しになっていた。彼のいつものおだやかな態度はすっかりなくなっていた。トランサム夫人が日頃おびえていたのは、ジャーミンのこうした一面であった。夫人の近親者のあいだでは、彼は、一応、夫人に恩顧を受けた雇われ人ということになっている。しかし、夫人は夫人で、かつて彼によってその心に焼きつけられた罪の極印を、一人ひそかに耐え忍ん

でいる。彼は、いつなとき残忍で横柄な態度に出ないとも限らない。それゆえトランサム夫人は、息子に対してそうであるように、ジャーミンに対しては無力な存在であった。

規定にはまったことを愛好するこの婦人は、これ以上相手を説得するための言葉を言い出そうとはしなかった。^⑧

この場合、トランサム夫人は、道徳家のいわゆる「悔悟」に向って進もうとする衝動を少しも感じてはいない。いや、彼女はそれを感じることのできない女性である。

彼女は、フェンショーのヘロン家や、ヒルベリーのバッジャー家という家柄や血統の範囲外の事柄を、詳しく眺めてみたことは全くなかった。つまり、彼女は、その生活の全域を飾っているカンヴァスの^{うしろ}後に隠されているものに気付いたことはなかったのである。カンヴァスのほの暗い背景には、火の燃えついた台と律法の板が描かれている。そして前景では、ディバリー夫人が、彼女のことで陰口をささやき、ワイヴァーン夫人は、彼女を晩餐会に招待しないことにしたと云っている。^⑨

また、次の箇所では、彼女は、「君が事の真相をハロルドに打明けたとしても、僕はかえってそのほうがよい」というジャーミンの言葉に対して反ばくを試みている。

「あなたがそうおっしゃったからには、わたしは決してあの子に打明けたりはいたしません。あなたは破産して身を滅しておしまいになればよろしい。いや、それとも、ご自身の身の安全を計るために、もっともっと卑劣なことをなされればよろしい。わたしは、かねてよりそう思っていました。あなたのようなひとがいなければ、わたしは、こんな罪なことをしでかさずにすんだでしょう。」^⑩

以上の言葉のなかには、トランサム夫人自身のもつ限界が示されているが、この限界は、彼女の直面する悲劇の本質を形づくっているものである。そして、かかる限界が表わされていればこそ、ジョージ・エリオットの描き出すトランサム夫人は、読者に深い感銘を与え、かつ、彼らの共感をよびさます人物たり得るのである。次の引用文は、張りつめた瞬間における、あの救い難い苦悶に彼女が一人で耐えている姿をとらえたものである。

ハロルドがテーブルの側を離れると、彼女は細長い客間に入ってゆき、そこをあちこち歩きまわることによって、彼女の不安な気持を鎮めようとした。こうしていれば、隣のハロルドの部屋へジャーミンが入ってゆくのがわかる。彼女はばら色のしゅす織の布を張った椅子やカーテンの間をいったりきたりしていた。今の彼女にとって、この世の偉大な物語も、自分のささやかな生活の物語のひとこまにすぎず、今までの彼女の運命が辿った狭わいな道筋に強烈な光がさしている部分を除けば、すべてがほの暗く、さだかでないものであった。もっとも、この運命が辿った道筋も、女性一般の味わう苦悶からみれば、決して狭いものとはいえなかったのであるが。遂に予期した如くベルが鳴り、それに続いて人の足音が響き、ドアが開けられ、そして閉ざされる気配がした。もはや室内を歩きまわることできず、彼女は、どうしようもなく、そうか

とって祈る気持にもなれないまま、クッションを載せた大きな椅子に深々と腰を下ろした。今や彼女は、神の怒りや憐みを考えていたのではなく、息子の、みずからに対する怒りや憐みを考えていたのである。要するに、彼女は、死によってではなく、生によって、自分がいかなる事態に追いつめられてゆくかを考えていたのだ。^⑧

以上の節には、教訓的な調子はなんら含まれていない。そこにあるものは、痛烈で、人の心を信服させずにはおかないところの劇的「確証」^⑨である。しかも、ここに示されている道徳性——それは、ここでは、必然性を劇的に表出したものであるが——は、心理的写実主義者によって直覺的にとらえられたものである。トランサム夫人に課せられた緊張の度合が高まるにつれ、われわれの同情的関心もまた次第によびさまされてゆく。従って、第四十二章でジャーミンが「ハロルドが、事の真相を知って、このわしにまっこうから抗ってくるなどとは考えられん……」と語るあの緊迫した場面では、ジャーミンのおこなうかかる陳述が、夫人にとって非常に残酷なものであることをわれわれは充分に感じとることができる。さらにまた、トランサム夫人は、「わたしはこの人と言ひ争いなどすまい。この人のことをどう思っているかということなども口に出して言うまい」という決意を、生涯かかって固めたのであるが、彼女は今やこの決意をひるがえしてまで彼と烈しくわたりあう。この事実によっても、彼女の身に振りかかってきている災難がいかに決定的なものであり、また、それが、いかに重大な影響を彼女の生活の全域に及ぼしているかを、われわれは充分に理解することができる。

ジャーミンは申し分なく見事に描写されている。彼の考えによれば、応報の女神ネメシスも彼みずからのものである道徳性とかなり相応した面をそなえている。彼は、「腹立たしさと怒りを感じながら」次のように考えている。すなわち、「『ハロルド・トランサムは、正義を貫くためではなく、災難としてわが身にふりかかった天の配剤の媒介者だったのだ。というのは、百人中九十九人までのものが、天罰をまぬがれ得るとすれば、果してこの世に正義はあり得ようか、それはどうも疑わしい、ということになるからである』と。そして彼は、それと気づかぬうちに、実のわが子ハロルドを次第に憎み始めていた。」^⑩作者はこの父と子の類似点をきわめて巧妙な筆緻で描き、しかも、それぞれの利己的な生き方についても明確な識別を試みている。

もし、われわれが、ハロルドとジャーミンの二人の男性が「いかにも女流作家の手によって描き出された人物である」^⑪ということに同意するならば、それは、彼等が読者を信服させるに足る存在であるという感じを弱めるような意味においてでは決してない。むしろ、それは、これら二人の人物の男らしさに対する、鋭くて、しかも、「当を得た」分析的態度は、女性の手を経なければなし得ないようなものである、という意味においてである。ジャーミンのおかれた立場は、ティトー・メレマのそれに似かよっている。しかし、前者は、もはや、抽象的なものから具体的なものへと向かおうとする作者によって非常な努力を重ねつつ、考えに考え抜

かれて創り出された人物ではない。彼は、われわれに迫ってくるようにリアルな、しかも、あるがままの生きた姿として描かれている。したがって、ジャーミンは、疑う余地もなく明白に具体的な姿で「そこ」に場を与えられ、かつまた、疑う余地もなくあきらかに、一人の男性として、描き出されている。(一方、ティトーに関していうならば、彼のような人物が、たとえ存在の場を与えられたとしても、彼は、一人の男性であるとはいえないだろう。) 要するに、ジャーミンは、「利己的な性格からくる漸次的要求に導かれるまま、幾年かの才月を過してきたひとたち」のうちの一人なのだ。そして、「このような利己的性格は、日常生活の場における複雑に入り組んだ虚栄的行為や、さもしい慾望となって外に現れ出るものである。」^④

それでは、ハロルドに関してはどうであろうか。彼は「精力的な意志、鋭敏な直感力、および、時と場合によっては、『実際的精神』にもつながりをもつあの偏狭な想像力」^④の持ち主である。つまり彼は、「賢明で率直で、気前のよいエゴイスト」^④的存在なのだ。

ハロルドの気前のよさは、他人に対する共感性が欠けているものであった。つまり、彼の気前のよさは、自分が恩義を施したり、好意を示したりしている相手の意向を深く理解し、かつ、それを大いに尊重する気持から生じたものではなかった。母親に対する彼の親切心にしても、それと同様であった。他人をしあわせにするために、彼は彼なりに手を尽くした。ところが、それは、相手に多少でも分別がないかぎりうまくはゆかないというやり方であった。^④

勿論、ハロルドは、自分の素姓については、どうすることもできない。彼の生い立ちの不幸な成り行きにまつわる、皮肉なネメシスの要素は、彼の語る次の言葉のなかに暗示されている。^(三)

「えいっ、いまましいい！こやつ女房だって！その女房に関する真相を、このおれさまがつかもうとしているってことを、こやつは考えているのだろうか。」^④

ハロルドの如き人物を中心にして、ひとびとを深く感動させるような悲劇を創り出すことができるのは、ジョージ・エリオットのいま一つの特徴を表わしている。というのは、次に述べるような場面^④においては、ハロルドは、あきらかに、悲劇の中心人物となっているからである。切迫した急場に追いつめられて思わずジャーミンは、「君の父親はこの僕なんだよ。」と口走ってしまう。その彼の方にハロルドは烈しい勢いで向きなおり、今や相手をねじふせようと取っ組み合いをしかける。その時突然、鏡のなかに二つの顔が並んで写っているのが、ハロルドの目に飛びこんでくる。彼は、「今まで自分が深い憎しみの情を抱いていた父親という存在が、ここで、あらためて証明されたのだ」と悟る。このように、物語の一場面を、ごく大ざっぱに述べてしまうと、ひとびとはそこに、ややメロドラマ的な調子を感じずるかもしれない。しかし、本文中では、ハロルドが自分の出生の秘密を悟るこの場面は、決定的に適切な形

で表現されている。同時にこのことは、作者ジョージ・エリオットが、その描かんとする主題における高度な悲劇的着想を、いかに見事に正当化したかを示すものである。「道徳的には善でもなく悪でもない中庸の存在」‘moral mediocrity’^⑧を素材とし、そこから悲劇を創作することが可能であることもまた、ジョージ・エリオット独特の特質をあらわしている。この‘moral mediocrity’という用語は、継ぐべき正当な財産を譲り受けたエスター・ライアンが、トランサム・コートの生活を体験して得た印象を言いあらわすのに用いている言葉である。つまり、トランサム・コートの生活を知り始めた当初エスターは考えている。「トランサムのご主人はかぶと虫を相手に暮していらっしやる。でもあの奥さんは〔一体何を求めて暮しておみえだろう〕……」^⑨と。人間の凡庸さと「陳腐さ」に対し、ジョージ・エリオットが心に抱いているヴィジョンには、センチメンタルな態度は少しも感じられない。彼女は、これら人間的凡庸と陳腐さのなかに、幾多の同情すべき点をみいだしている。また彼女は、このような題材を扱うに際し、人間の尊厳性を主張しようとしている。そして、このような形で、人間的尊厳を主張し得る作家は偉大である。この点で、ジョージ・エリオットとフロベールを対照的に眺めてみることは、考察に価すべきことかもしれない。

『フィーリックス・ハウルト』は、教養人ならば誰でも読んだことがあると思われる、そういった種類の小説ではない。また、たとえそれが読まれたにしても、この作品が、ひとびとの口の端にのぼって話題にされるということはないであろう。それゆえ、この作品に含まれている小説〔というジャンル〕における最も優れた〔文学的〕特質の一つが、一般のひとびとに認められていないとしても、それは当然のことである。ジョージ・エリオットが、彼女の作品のうち最も円熟した一部分を、それとは全く異質的な他の大部分のなかにはめこんだことは、実に腹立たしい限りである。もっとも、それは、『ロモラ』のように、「読んでおもしろくないもの」ではないけれども。しかも、われわれは、この作品のなかの生彩に富んだ部分にみられる最高に優れた特質については、認識を新たにすべきであろう。換言すれば、前述の事実（すなわち、『フィーリックス・ハウルト』において、かくも未熟な大部分のなかに、最も円熟した一部分がはめこまれているという事実——訳者説明）は、実に歎かわしいことである。しかも、一方では、この事実は、作家としてのジョージ・エリオットの特質を示すものである。さて、ところで、ただ一篇の作品において、ジョージ・エリオットは、終始一貫して、その円熟した才能を充分に発揮することができた。（ただし、われわれは全く無条件でそう断言することはできないのであるが。）いうまでもなく、これが『ミドルマーチ』である。

原註

- (一) ここに引用されている言葉を、次に掲げるフィーリックスが、その後、エスターに語りかける言葉と比較せよ。「彼はなおも彼女を見つめながら言葉を続けた。『ひとのもっているさまざまな影響力を細かく観察すれば、結局それは、容姿端麗であるばかりでなく、精神面においても気品溢れる

一人の女性が、男性に対して、どんな影響力をもっているかを測ることになる、僕はそういうものではないかと思えます。そのような女性は、彼女に対する男性の情熱を一度にどっと押し流し、彼が常日頃抱いている人生の大目的をも呑み込んでしまうものなのです。』^⑤

(二) 「息子が急進主義者であると知らされたとき、トランサム夫人は、ショックのあまり、口もきけない有様であった。あたかもそれは、額に焼印を押されたひとから、習慣的動機が一切根絶やしにされるのと同じ状態であった。一方、ハロルドはといえば、彼は彼なりに、孝行心に反撥する気持は毛頭抱いていなかったが、忙しい彼の想念は、尊大にも、女心には何の顧慮も払わないその習性によって一種の制約を受けていた。」^⑥

(三) 「『母さんはなぜあんなやつをかばおうとなさるのですか。』……トランサム夫人の感情は次第に激してきて、それから、ぞっとするような恐怖心が湧き起こってきた。それは、われわれが、自身の体に似て、なま温く、柔らかい、呼吸をしているものをなぐりつけようとして、思い切りこぶしをふるったとき、ぶった相手が実は固くてびくとも動じないものであったために、突然起るショックのように痛みの激しいものであった。かわいそうに、トランサム夫人が打ちやくした相手は実は、過去というあの石のように固い耐え難いものであって、そのため彼女は、感情をいらだたすのみであった。」^⑦

訳註

- ① これは、ヘンリー・ジェイムズ著『部分的素描』*Partial Portrait*, p. 51 より引用された言葉である。F. R. Leavis氏は、この部分について、『偉大なる伝統』*The Great Tradition* p. 33~34 においてすでに言及しているが、これは、ジョージ・エリオットの文学における、読者の側からみて比較的満足し難い面の特質に関して述べられた一般的見解を適切に表現したものとして、ヘンリー・ジェイムズの評論から引用されたものである。
- ② 『ロモラ』*Romola* (1863) のことをさしている。
- ③ ヘンリー・ジェイムズ著『部分的素描』p. 51
- ④ Tito Melema『ロモラ』に登場する人物。女主人公ロモラと結婚する若いギリシャ人の才子。
- ⑤ Savonarola 十五世紀フロレンスのドミニコ派修道士。熱烈な予言的説教家であり、メジチ家の失墜後、民主党を率い、仏王チャールズ八世に味方したため、法王アレグザンダー六世によって異端者として死刑に処せられた。ジョージ・エリオットは彼をモデルにして小説『ロモラ』に登場させている。
- ⑥ Sir Leslie Stephen(1832~1904) リーヴィス著・藤井訳『ジョージ・エリオット論』(一)の訳註^{②③}参照。なお、レズリー・スティーヴンはその著『ジョージ・エリオット論』P.134において、以下のような長い引用を行なっている。“Not that Savonarola had uttered and written a falsity when he declared his belief in a future supernatural attestation of his work; but his mind was so constituted that while it was easy for him to believe in a miracie which, being distant and undefined, was screened behind the strong reasons he saw for its occurrence, and yet easier for him to have a belief in inward miracles such as his own prophetic inspiration and divinely-wrought intuitions, it was at the same time insurmountably difficult to him to believe in the probability

of a miracle which, like this of being carried unhurt through the fire, pressed in all its details on his imagination and involved a demand not only for belief but for exceptional action.” ——
Romola, Chap. LXIV, ‘The Prophet in His Cell’

- ⑦ Shakespeare : *Hamlet*, ACT III, SC. I, 1. 56
- ⑧ 『ロモラ』第三部、第四十四章
- ⑨ David Friedrich Strauss (1808~74) ドイツの神学者。いわゆる「高等批評」学者でキリスト伝を一個の神話にすぎぬとした。彼の *Leben Jesu* 『イエス伝』 (1835) をジョージ・エリオットは 1846年に英訳している。
- ⑩ 『ロモラ』第三部、第五十二章
- ⑪ 『ロモラ』第三部、第六十一章
- ⑫ John Stuart Mill (1806~73) 英国の経済学者、哲学者、社会思想家。経済学者 James Mill の息子。はじめは功利主義者であり、1823年に功利主義協会、26年にロンドン討論会を創設、哲学的急進主義の思想家として重きをなした。23年より58年にかけて東インド会社に勤務した。26年秋から27年にかけて「精神の危機」を経験、この危機を脱してからは、Saint-Simon の社会主義、Carlyle の人道主義、Comte の社会学などの影響をうけて功利主義思想を補正し、また社会科学方法論の確立につとめた。主な著作に、『論理学体系』 (*A System of Logic*, 1843) ; 『経済学原理』 (*Principles of Political Economy*, 1848) ; 『代議政体論』 (*Considerations on Representative Government*, 1861) ; 『自伝』 (*Autobiography*, 1873) などがある。
- ⑬ Matthew Arnold (1822~88) 英国の詩人、批評家、教育家。イギリスの近代的パブリック・スクールの建設者として有名な Thomas Arnold の子。オックスフォード卒業後、視学官として忠実に職務をたすかたわら詩作にはげんだ。その詩の主なものは二巻の『詩集』 (*Poems*, 1853 および *New Poems*, 1857) におさめられている。彼は「詩は人生の批評」であると主張した内省的な冥想詩人として高く評価されている。人間の内面生活と外的生活との矛盾を終生意識した彼は、頼るべき信仰の失われていく時代の精神的苦悩、「近代生活の奇妙な病」を古典的学識に包んで清澄な言葉で歌った。1857年 オックスフォード大学詩学教授となった。文芸批評家としての彼の著作には、『ホーマー翻訳論』 (*On Translating Homer*, 1861) ; 『ケルト文学研究』 (*The Study of Celtic Literature*, 1867) ; 『批評試論』 (*Essays in Criticism*, 1865, 1888) などがある。
- ⑭ Auguste Comte (1798~1857) フランスの社会学者。実証主義哲学の第一の唱道者であり、形而上学や啓示宗教を排斥して、これに代わるに、歴史にもとづく社会主義倫理をもってする。主著は『実証哲学講義』全六巻 (*Cours de Philosophie Positive*, 1830~42) である。この書で彼は知識を神学的、形而上学的、実証主義的の三段階に分け、また一般性が減少して複雑化するに応じて科学を数学、天文学、物理学、化学、生物学、社会学に分類した。晩年には初期の理性主義を変じて感情尊重の思想を加え、「人間の宗教」という一種の宗教をつくった。イギリスにおいては、F. Harrison が彼の系統をうけついで人であるが、J. S. Mill もその影響をこうむっている。
- ⑮ 『ロモラ』第三部、第六十一章
- ⑯ John Chapman (1821~94) 『ウェストミンスター評論』の主筆。ジョージ・エリオットがシュトラウ

ス著『イエス伝』の翻訳を出版したのは彼の世話による。その後、チャップマンは彼女に『ウェストミンスター評論』の副主筆の地位を提供した。そこでジョージ・エリオットは1851年ロンドンに出て、チャップマン家に下宿し、新聞雑誌に寄稿する仕事を始めた。Gordon S. Haight 教授は、その編集になる著書『ジョージ・エリオットとジョン・チャップマン』（1940）において、若き日のジョージ・エリオット、メアリ・アンのロンドン生活時代（1851～54）の一面を充分うかがい知ることのできる資料を提供している。すなわち、それによれば、チャップマンは、『フロス河の水車場』に登場するスティーヴン・ゲストのモデルともいうべき、軽薄な伊達男的タイプの男性であったらしい。このチャップマンと彼女の間関係は、二人とも恋人同志というわけではなかったが、お互いに好むところが一致して、深く共鳴しあっていたようである。しかし、当時、チャップマン家には、子供たちの家庭教師であると共に、チャップマンの愛人でもある Elizabeth と彼の妻 Susan が同居していた。このような状況におかれた場合、三人の女性の関係はお互いにうまくゆく筈はなく、感情のもつれから烈しいいさかきになり、メアリ・アンは追いたてられるようにしてコヴェントリに帰っていった。その時のことを、チャップマンは1851年3月24日付の日記に次のように書いている。

M. (=Marian) departed today. I accompanied her to the railway. She was very sad, and hence made me feel so. She pressed me for some intimation of the state of my feelings. I told her that I felt great affection for her, but that I loved E and S also, though each in a different way. At this avowal she burst into tears. I tried to comfort her and reminded her of the dear friends she was returning to, but the train whirled her away very very sad.

⑰ 『ロモラ』第三部、第六十一章

⑱ 『ロモラ』第三部、第六十一章

⑲ Frederic Harrison (1831～1923) 英国の法律学者、コントの流れをくむ実証哲学者、英国法学協会の法律学・国際法学教授（1877～1889）。英国実証哲学協会会長（1880～1905）。なおその主な著作は次のとおりである。*Oliver Cromwell* (1888); *Humanity : Religious Systems of the World* (1890); *Positivism : Its Position, Aims and Ideals* (1901); *Ruskin* (1902); *The Creed of a Layman* (1907); *National and Social Problem* (1908); *Autobiographical Memoirs*, 2 vol. (1911); *The Positive Evolution of Religion : Its Moral and Social Reaction* (1913).

⑳ 『フィーリックス・ハウルト』の創作にあたって、ジョージ・エリオットは二つのテーマを心に抱いていた。一つは、この小説の表題にあらわされている主人公フィーリックス・ハウルトを中心とする政治的テーマであり、いま一つは、トランサム夫人をめぐる道徳的ないしは悲劇的テーマである。前者において、作者は、政治的諸制度の改革と、社会を営む人間の生活との関係について、彼女なりに考えていた結論の劇的表現を試みようとしているのであり、後者においては、個人における人間としての成長発展が、環境や人生の転機においておこなわれる選択によって次第にはばまれてゆく過程をとらえようとしている。

㉑ Archdeacon William Paley (1743～1805) 英国の神学者、哲学者。その意匠証驗説はダーウィニズム以前の生物学界を支配した。その主な著作は次のとおりである。*The Principles of Moral and Political Philosophy* (1785); *A View of the Evidences of Christianity* (1794); *Natural Theology*

(1802). なお、'Paley's fat Pigeon' は、作品の本文中、それより数行前に言及されている 'your ringed and scented men of the people' のことを指して、これは聖職者の立場を揶揄的に表現していると思われる。

㉒ 『フィーリックス・ハウルト』第五章

㉓ 『フィーリックス・ハウルト』第五章

㉔ Sir Walter Scott (1771~1832) スコットランドの浪漫派の詩人、小説家。エジンバラに生まれ、早くからスコットランドの辺境地方の伝説や民謡に興味をもち、『辺境民謡集』(*The Minstrelsy of the Scottish Border*, 1802~3) 三巻を出し、さらに『湖上の美人』(*The Lady of the Lake*, 1810) によって長篇物語詩作者としての地位を確立した。その後、バイロンの出現によっていささか名声が衰えたのちは、もっぱら小説に力を注ぐようになり、『ウェイヴァリー』(*Waverley*, 1814), 『アイヴァンホウ』(*Ivanhoe*, 1819), 『ケニルワース』(*Kenilworth*, 1821) などを含む『ウェイヴァリーもの』を発表した。その作風は心理描写には欠けるが、数多くの登場人物を巧みに描き分け、地方色豊かに、筋立ても冒険と変転に富んで、英国ロマン主義を代表する作家といえる。

㉕ 『フィーリックス・ハウルト』第九章

㉖ F. R. リーヴィス氏は『偉大なる伝統』の p. 34 において、ヘンリー・ジェイムズの 'The truth is, perception and reflection at the outset divided George Eliot's great talent between them ; but as time went on circumstances led the latter to develop itself at the expense of the former —— one of these circumstances being apparently the influence of George Henry Lewes.' という陳述を引用しているが、ヘンリー・ジェイムズは、これらの断定的陳述によって、ジョージ・エリオットの後期の作品の中で特に知的なものが優勢になってきているという見解の裏づけをおこなっていると考えられている。ここで、'perceptive' と呼んでいるのは、対象を直覚的に把握する能力を指し、'reflective' とは、それについて内省的に観照する能力を表現しているといってもよいであろう。

㉗ 『偉大なる伝統』p. 31.

㉘ 'impersonality' 「個の超越」というのは、『フロス河の水車場』のマギー・タリヴァーの内面性を表現する際、作者によって描写されたマギーの精神的高揚と自己犠牲の境地を批評家が批判する場合、達成さるべき一つの基準として用いられている概念である。すなわち、'impersonality' とは、作者が描き出そうとする対象を本質的に識別するための必要条件であり、かつ、対象と自己とをあくまで明確に区別して考える能力であるが、マギーの精神性が対象とされる場合においては、かかる条件や能力はいまだ達成されざる段階にあるとしてリーヴィス氏は批判している。マギーの精神面の未熟さはここに起因すると考えられる。

㉙ たとえば、ロモラやマギー・タリヴァーはこの系列に属する女主人公である。

㉚ Edmund Burke (1729~97) イギリスの政治家、思想家、アメリカ合衆国の独立やフランス革命など内外の多事多端な時代にあって、良識的で保守的な立場からイギリス政治の動向を巧みに指導した。主な著作は次のとおりである。『崇高と優美の哲学的研究』(*A Philosophical Enquiry into the Origin of Our Ideas of the Sublime and Beautiful*, 1756) ; 『アメリカの課税を論ず』 (*On American Taxation*, 1774) ; 『植民地融和政策論』(*On Conciliation with the Colonies*, 1775) ; 『フランス革命

考察』(*Reflections on the Revolution in France*, 1790).

- ③① François René Chateaubriand (1768~1848) フランスの文学者、政治家。『キリスト教の精髓』(*Le Génie du Christianisme*, 1802) によって知られ、その中のアメリカ土人のロマンスを描いた『アタラ』(*Atala*) および半自叙『ルネ』(*René*) が有名。
- ③② *Lyrical Ballads*(1798)英詩史上イギリス、ロマン主義時代を画する作品。ワーズワース(*Wordsworth*) およびコウルリッジ (*Coleridge*) 共著の匿名詩集。ワーズワースが田園における日常生活に詩情を見出してうたったのに対し、コウルリッジには、起自然的な題材をとりあげたものが多い。特に、ワーズワースの『ティンターン修道院の詩』(*Lines Composed above Tintern Abbey*) は、彼の少年時代からの自然観の変遷を中心に、自然との霊交を主題とした瞑想詩として最も勝れている。コウルリッジのものでは、『老水夫行』(*The Ancient Mariner*) が特に有名である。
- ③③ Robert Southey (1774~1843) 英国の詩人、文学者。ウェストミンスター学校に在学中、鞭打の悪習を攻撃して放校され、1792年オックスフォード大学に入学、独自の研究を積み、長篇叙事詩『ジャンヌ・ダルク』(*Joan of Arc*, 1796) を書いた。やがてコウルリッジらとともに、『権力平等団』(*Pantisocracy*) という理想郷をアメリカに建設することを夢みたら失敗におわった。1795年に結婚し、スペイン、ポルトガルに遊び、南欧文学につよく心をひかれた。3年後帰国し、イングランドの湖畔地方に定住した。1808年以降『クォーターリー・レビュー』の寄稿者となったが、この頃すでに、かつての革新的な立場を変え、保守主義をとっていた。主な詩作品としては、『破壊者サラバ』(*Thalaba the Destroyer*, 1801) ; 『マドック』(*Madoc*, 1805) ; 『キーハマののろい』(*Curse of Kehama*, 1810) などがある。
- ③④ 『フィーリックス・ハウルト』第一章
- ③⑤ 『フィーリックス・ハウルト』第一章
- ③⑥ 『フィーリックス・ハウルト』第九章
- ③⑦ 『フィーリックス・ハウルト』第四十章
- ③⑧ 『フィーリックス・ハウルト』第四十二章
- ③⑨ 『フィーリックス・ハウルト』第三十四章
- ④⑩ constation (constate からくる名詞形 constation の誤まりではないか) to constate = to establish as certain, ascertain, verify. (<L : constat) ここでは「証言」とか「確証」といった意味に考えられる。
- ④⑪ 『フィーリックス・ハウルト』第二十一章
- ④⑫ レズリー・ステューヴンは、『フロス河の水車場』のステューヴン・ゲストについて 'He is another instance of her incapacity for portraying the opposite sex.' (『ジョージ・エリオット論』P.104) と述べて、その描写の不適切さを非難しているのだが、一般には、ジョージ・エリオットは、女流作家として、男性を描くことは苦手であったといわれている。
- ④⑬ 『フィーリックス・ハウルト』第四十二章
- ④⑭ 『フィーリックス・ハウルト』第八章
- ④⑮ 『フィーリックス・ハウルト』第八章

- ④⑥ 『フィーリックス・ハウルト』第四十三章
- ④⑦ 『フィーリックス・ハウルト』第二章
- ④⑧ 『フィーリックス・ハウルト』第四十七章
- ④⑨ 『フィーリックス・ハウルト』第四十三章
- ⑤⑩ 『フィーリックス・ハウルト』第四十章
- ⑤⑪ 『フィーリックス・ハウルト』第二十七章
- ⑤⑫ 『フィーリックス・ハウルト』第一章
- ⑤⑬ 『フィーリックス・ハウルト』第三十六章